

## 歴史書を埋める国民のメンタリテイ

「デラウエア河流域入植三百周年記念祭」を読み解くための史的背景について

鈴木俊弘

### 問題の萌芽

ロックフェラー家主導によるウィリアムズバーグの珍妙な植民都市復元事業、ビルグリム・ファーズのプリマス上陸三百周年記念祭、メリーランドへの英国カトリック教徒の入植三百周年記念祭、ハーヴァード大学創立三百周年記念祭——二〇世紀前半のアメリカ合衆国の東海岸諸州では、大小さまざまな植民活動の「三百周年記念」行事が開催され、まるで一七世紀を我がものにしようというイベントが各地に広がった。

その様子は一九三八年に至ってひとつの頂点に達した。一七世紀欧州の北辺に大帝國を形成していたスウェーデンが、諸王

家の流行に便乗し特許状を付与したオランダ商人経営の西インド会社による、冗談のように小さな北米大陸植民地事業の端緒——のちにオランダ王領、続いて英国の支配下に入り「ニュー・スウェーデン」と総称されたデラウエア河流域入植団の初上陸——を讃える「三百周年記念」の開催にあたって、合衆国連邦議会は公決議<sup>1)</sup>を採択し、スウェーデン王室と政府代表団を國賓招待する連邦政府主催の國家祝祭に昇格させたのだ。それはいかにしてアメリカ合衆国の〈歴史〉のなかにスウェード人の貢献度を「公認」させようかと苦心し、一九世紀後半より「エトノスの内祝」<sup>2)</sup>的な記念祭<sup>3)</sup>を各地で自主開催してきたスウェ

ード系アメリカ人たちの悲願の結実であった<sup>③</sup>。

しかし、スウェード人たちにとって不測の事態が生じる。歴史の当然からフィンランドもデラウエア河流域三百周年記念祭に参加する権利を有するとフィンランド共和国政府およびヘアメリカのフィン人(Amerikan suomalaiset) すなわちアメリカに定住したフィン系移民たちが活発な外交運動を展開したので。「デラウエア河流域における最初の永住入植三百周年記念式典にフィンランド政府の招待を追加する案を発議するものとします。なぜならば、入植が行われた当時、フィンランドはスウェーデン王国の一部だったからであります(……)一三五〇年頃までに、フィンランドはスウェーデン王国東方の自治領域になったといわれており、(……)以降一八〇九年にロシア帝国がフィンランドを征服するまで、(……)ほぼ六百年間にわたり、スウェーデンとフィンランドにおける法・司法制度・行政組織・教育・信仰は、王国内の二地域が等しく恩恵を受けるようなかたちで制度化されていきました。このような事実は、一七世紀のニュースウェーデン植民地の状況を論ずるさいにも是非心に留めておかなければなりません<sup>④</sup>」。スウェーデン政府の露骨な不快感表明と下院での激しい議論を経たものの、一九一七年に独立を果たしたばかりの新興共和国フィンランドの代表団を「デラウエア河流域三百周年記念祭」に追加招待す

る決議案<sup>⑤</sup>は連邦議会上院と下院を通過し、晴れて合同決議された。ようやく二十歳になったばかりの「フィンランド国民」は、一七世紀スウェーデン王国史なかの「可視的な」国民として、まずアメリカ人たちに承認されたのである。

#### 1 歴史書を埋める国民、埋められるための歴史書を書く博士

しかし本当の問題はむしろ、フィンランド共和国が「デラウエア河流域三百周年記念祭」の当事祝賀国と正式に承認された時点から生じることになった。一九三八年六月一日、ペンシルヴェニア州チエスター市において、スウェード人を抜きにしたフィン人独自の入植三百周年を記念すべく、「アメリカ川フィンランド・デラウエア河流域三百周年記念委員会」と市長をはじめ名士たちが参列し、厳かな祭典が執り行われている。それは記念行事の中心に据えられた「入植三百周年記念碑」の台座に記念物を埋蔵するという、「デラウエア河流域三百周年記念祭」を祝うフィン人にとって何よりも重要で象徴的な儀式であった。しかし、記念碑のなかに埋められた記念物とは、驚くべきことに五冊の歴史書——二〇世紀のヘアメリカのフィン人<sup>⑥</sup>が記述したフィン人の「歴史」だったのである。そのなかでもコロンビア大学準教授ジョン・ヘンリー・ウォリネン博士の執筆による『デラウエア河畔のフィン人』<sup>⑦</sup>は、埋蔵時に著

者の署名が許された唯一の歴史書であり、フィン人たちの「公式歴史書」であった。墓標のような記念碑の直下に歴史書を埋めるといふ吊いを匂わせる行為は、三百年前の「スウェーデン王植民地」と、この地を現有するアメリカ合衆国という国民国家との系譜のなかに、土地という現実的なものを媒介として、ひとつの〈歴史〉の物語が伏臥していることを可視的に指示している——歴史書が、死体のように埋められることで、その〈歴史〉が確かにそこに生きていたことを誰しもが確認できるように。

一九三八年一〇月一五日、アメリカカリフォルニア州・デラウェア河流域三百周年記念委員会の最終会計報告書が、会計委員ジョン・サトリから発表された。全米三十余州から集められた資金の合計は、二万ドルをはるかに超える莫大な額であった。その支出の内訳には、上記チェスター市に建設された記念碑に全支出のうち約二七%、連邦政府公認の記念切手の発行に約四%を使用し、その他として事務所の諸費用等が計上されている。しかし、これらの項目を合算しても上回るほど大きな支出項目が存していた。それは彼らが三百年祭最大の事業として遂行した、ウォリネンによる『デラウェア河畔のフィン人』の出版と販売に要した支出であった。この「書籍出版とコロンビア大学出版局への経費支払い」の総額は七万二千ドルにのぼり、実に

全体の支出の約三三%をも占めた。委員会は、費やせる限りの経済的・人的資源を〈アメリカのフィン人〉待望の歴史書の出版にそそぎ込んだのである。博士の著作は、多くの人たちの献身的な労力と、多額の資金と、そしてそれらに見合うだけの結果を期待され、アメリカ社会へと放たれた。フィン人たちのデラウェア三百周年記念祭は、ある意味で、ウォリネン博士に歴史書を執筆させることが目的であったとして過言ではない。

はたして、このような任務を託されたウォリネン博士とは何者なのだろうか？ 今ではアメリカ最高の作曲家のひとつ、チャールズ・ウォリネンの父と記した方が通りがよいかもしれない。ウォリネンは一八九七年、ロマノフ家当主を大公に戴くフィンランド大公国の西都ヴァーサに生まれた。大公国への「ロシア化政策」の強制が厳しさを増した一九一六年三月、ウォリネンの家族は亡命を決行する。いまだ厚く凍結している初春のボスニア湾をスキーで踏破するという過酷な逃避行に、犠牲者を出しながらも一家は対岸のスウェーデンへ到達。その後一家は大西洋横断汽船に乗り、すでに合衆国に移民していた同郷人を頼って、マサチューセッツ州に居を構えた。

一九一八年、ウォリネンは同州クラーク大学に入學、優等で卒業。同大学の大学院に進学して一年で歴史学の修士号を取得し、同大学の講師そしてアイオワ大学の講師と経歴を積み、一

九二四年にはコロンビア大学でバルトリスカンディナヴィア地域史の専任講師として採用された。一九三一年に博士号取得論文『近代フィンランドのナシヨナリズム』を提出し、博士号を授与されている。ニュースウェーデン植民三百年記念祭までにウォリネンは學術研究書をあいついで出版し、合衆国のみならずフィンランド共和国でも、「フィンランド史研究の第一人者」としての名声を手にしていた。

また、(当時も)合衆国でもっとも権威ある歴史学専門誌『アメリカン・ヒストリカル・レビュー』誌の常任執筆者として、フィンランド、スカンディナヴィア半島、バルト海地域の歴史研究書の評定を一手に引き受けていた。これはウォリネン博士が合衆国最大の歴史学会において、フィンランドのみならず一七世紀のスウェーデン王国の版図に覆われていた、さまざまな民族についての歴史に関する著作を批評し、その内容の価値評定をある程度まで決定できたことを意味している。また博士はアカデミズムにおいて北歐地域の専門家という評価のみならず、近代史全般の研究者としても非常に高い地位を獲得していた。一九二五年には早くも、当時最新の学問成果を取り込み実証主義的な歴史年表形式の採用で定評のあった歴史事典『ブレンツ世界史事典』の改訂版共同執筆者として名を連ね、さらに一九三六年、ウォリネン博士は同僚のコロンビア大学準教

授エドワード・M・アールとともに、コロンビア大学の教養課程で用いられる歴史学の学生指導書を執筆し、そこで彼は徹底した近代的史料批判の技法と歴史事象について非常に緻密な解説を展開している<sup>⑩</sup>。彼の歴史家としての堅実なキャリアには、のちにコロンビア大学歴史学部の学部長というポストが用意されることになる。

アメリカ合衆国内の非常に小規模なマイノリティー集団であったフィン人にとって、ウォリネン博士は、合衆国内外のアカデミズム界で名を轟かせる「エリート中のエリート」として、まったく得難い存在であった。博士が「英語で執筆する」フィンランドについての歴史書は、他に比類なき利点——アメリカの知識人層、そして知識欲の旺盛な一般読者層に「読んでもらえる」可能性——をもっとも期待できたのだ。ウォリネンに集まる期待と希望は、これまで自身の来歴を語る事ができなかったフィン人という「歴史から疎外された国民」の〈歴史〉を、「歴史学」というディシプリンの枠内で分節化し、アメリカ社会に堂々と提示することであった。それは博士の高い学歴・肩書き・歴史家としての地位、なによりも彼の勤める「コロンビア大学歴史学部」の威光をもってのみ万人に承認されうる事業だったのである。「コロンビア大学」の冠と書物をあしらった出版局徽章は、〈フィン人〉の物語をアメリカ合衆国の歴史の

表舞台に誘う招待状となる希望なのだ。「デラウェア河流域のフィン人植民者たちを題材にし、英語によって書かれた学術的価値を有する歴史研究書発行の計画。この仕事は(……)ウォリネン教授によって遂行されるよう承認を得ている」<sup>11)</sup>。

## 2 ウォリネン博士の歴史書と、その行間に書かれたもの

一九三八年六月一日、ウォリネン博士の歴史書は異例の安価で出版された。しかし、もっと驚かされるのは初版五千部というそのあまりに多い印刷部数である。出版と同時に、移民たちのネットワークに大規模な広告が展開された。ニューヨーク州の『開拓者』紙は、この『デラウェア河畔のフィン人』の出版と宣伝に全面協力し、この歴史書に最高の賛辞を送りながら、読者への購入を勧めている。

まさにいま三百周年の祝祭をあげようとしている(……)ニューズウェーデン特許会社の植民事業でフィン人が果たした役割についての完全な物語を知ろうとしたいとき(……)われわれにとって知りたい事実がすべて詰まっている信頼ある歴史書はただの一冊もなかった。

しかしついにこの欲求は、コロンビア大学からウォリネン教授の著作『デラウェア河畔のフィン人』が出版されること

で満たされよう。この魅力的な著作は、(……)ニューズウェーデン植民地におけるフィン人の物語を余すところなく描写し、それを細心の注意をもって証明する。

(……)『デラウェア河畔のフィン人』の出版は、間近に迫ったデラウェア三百周年記念祭へアメリカ国民の視線が注がれる時宜に適切、かれらにフィン人の視点によるデラウェアの物語を提供することになるであろう。コロンビア大学出版局の奥書が押された史実は、アメリカの歴史学研究者のなかで、特別な価値と重要性をあたえられることだろう<sup>12)</sup>。

いったい「コロンビア大学出版局」という知の権威をもって、フィン人たちは如何なる「史実」を提示し、またその「史実」をアメリカの歴史学に承認させようとしていたのであるうか。われわれはそこにフィン人たちの抱えていたメンタリティにかかわる問題を考えなくてはならない。なぜならば、当時のフィン人たちがウォリネン博士の歴史書に過度な熱意を入れあげているのとは対照的に、同時代の知識人たちは彼らの行動を冷やかに判断しているからである。

アメリカカリフォルニアランド・デラウェア三百周年記念祭委員会は、ウォリネン博士にきわめて過酷な課題を与えた。確か

にフィン人は、ニュースウェーデン植民地において重要な役割を担っていたはずであるが、デラウェア河流域史におけるフィン人の要素は、自立した特定研究とはなり得ない。同時代の史料文献のうちでスウェード人とフィン人とを区別して記されているのは、明らかに唯ひとつしかないのだ<sup>13)</sup>。

ウォリネン博士は『デラウェア河畔のフィン人』を執筆する一方、まったくの同時作業としてフィンランド共和国にて『フィンランド——その歴史的概観』<sup>14)</sup>を出版している。この本はフィンランドのスウェーデン王国による支配体制成立から、一大転換期となるロシア帝国への割譲、そして共和国としての独立までを国民史という視点から描いたものである。二十頁足らずの冊子にはほぼ八百年分の歴史を詰め込む章構成、フィンランドでの出版にも関わらず英文による記述、アメリカにて出版された書籍を中心に列挙した参考文献表から、この本はフィンランド国内での流通ではなく、はじめからアメリカ合衆国の一般読者向けにフィンランドを紹介することを目的としているように推測しうる。だが、「私にはまったく時間の余裕がありません」というのがこの時期のウォリネン博士の口癖であった<sup>15)</sup>。三百年祭の中心的存在として、委員会から最重要課題と名指された『デラウェア河畔のフィン人』の出版を目前に控え、さ

らに記念祭執行の事務局長として、多数の業務を一手に抱えていたこの時期に、なぜこのようなフィンランドの小史、それも歴史項目を箇条書きするような内容の紹介本を出版したのだろう。

何の前置きもなく「起源」とだけ、それも通常使われる“Origin”という単数形ではなく、“Origins”と複数形<sup>16)</sup>にて始まる第一部において、ウォリネン博士はいらだちを押さえるかのように慎重に言葉を選びつつ、しかし強い調子の文体で次のように語りかける。

フィン人の人種的な背景については、とくに前世紀のあいだに非常に多くのことが記され続けてきた。(……) もっともらしい言いまわしを使って、フィン人の源泉は東方の民族に存するとの学説がロマン主義時代(……)に形成されてきた。すでにこのような考えは破棄されはじめているし、近年の研究によれば、フィン人の起源を今日のロシアに位置する中央ヴォルガ地域に求める学説についてまで保留すべしとの指摘がなされている。(……)フィン語とスカンディナヴィア諸語との出自に明確な相違が認められないのならば、当然のごとくフィン人は北ヨーロッパ人の範疇に含まれてしかるべきだろう<sup>17)</sup>。

奇妙なことに、フィン人が「北ヨーロッパ人の範疇に含まれ」ないことが、どのようなことを意味しているのかについて、ここでウォリネンは何も語らない。博士が反駁するところの「書かれ続けてきた」ものの具体的な中身についても、同様に何も語られない。しかし、問題が語られざる文脈に確実に潜伏していることは明白だ。語られているが存在しない事実、存在していないが蔽としてそこに存在している事実というテクストの行間をくぐり抜けてしまう問題が、博士の拒絶している単数形「起源」の問題なのである。それはいったい何ものなのか。

### 3 フィン人の〈歴史〉に先回りして落ちる人種論の影

ここでいったん、議論の焦点を博士の歴史書から移してみよう。一九二五年に出版されたエヴァート・ロウヒによる『デラウエアのフィン人』<sup>18)</sup>もまた三百年祭記念碑に埋められた歴史書である。この著作はニュースウェーデン植民地におけるフィン人に言及した「英語による初めての歴史書」で、荒削りな論旨ながら出版当時には合衆国各地の歴史協会に大きな影響を及ぼし、各新聞雑誌の書評欄にて非常に好意的に紹介された<sup>19)</sup>。しかし、われわれが今日この本を読もうとするとき、彼の著書の構成の仕方にはウォリネンのそれと同じような、ある種のと

まどいを感じざるをえない。この書籍は、一七世紀の「ニュースウェーデン」植民事業に初期の段階からフィン人たちがどれほど大きな貢献を果たしたか、またその事実がいかに無視され続けてきたのかを主題にしているはずなのだが、その序章は奇異きわまりない始まり方をする——まずフィン語がいかに古く伝統ある文化語であるのかが力説され、舞台は約六千年前のユーラシア大陸から始まり、当時発掘が始まったばかりの上ナイルのエジプト中王国の遺跡発掘の新聞報道に触れ、千年前のイラン高原から古代エジプトの言語について話題が提供され、古代メソポタミア文明の言語と歴史、そのうち聖書についての言語的话题へとつづき、さらにそれらの言語とフィン語との類縁性について数多くの頁が割かれたのち、このように締めくくられる。

フィン人の身体的な特徴について述べるならば、その肌は白く、子供のうちは完全な金髪で、年をとるに従って亜麻色か赤毛に変化していく。黒髪や黒または褐色の眼はフィン人のなかにはほとんど存在しない。金髪であることがフィン系民族の根本的な特徴である。風土的な事情や他民族との混血をかんがみても、なおフィンランド、エストニア、北部及び中部ロシアやシベリアの一部のフィン人たちほど、今日この

特徴が顕著であるようなところはないのである。

フィン人の眼はおおよそ青色で、しばしば薄灰色であることもある。体軀は長身である。頭蓋は球形で脳の容量は、検定の結果によれば、人類のなかでもっとも多いという。フィン人たちに会ったことがない著述家は、何の考えもなしにフィン人は「頬骨が出ている」と記すが、これは誤りであり、逆に全人類のなかで頬骨の突出率ももっとも低いのである<sup>②</sup>。

続く章からは、何事もなかったかのように一七世紀の植民地の歴史を追う議論が述べられていく。だが、このような序章を提示する〈歴史書〉の構成技法は決してこの書籍だけに特異なものではなく、むしろ、この時期の〈アメリカのフィン人〉による著作には頻繁に確認され、とくに歴史事象を扱う著作では構成上の必須要素となる様相を呈してさえいた。〈歴史〉を語るうえで前置き講釈される「人種をめぐる自己弁明」の記述は、この時代のフィン人たちがアメリカ社会でどのような位置に追いやられていたのか——その不在なるテキストを逆さ写しする鏡となっている。

二〇世紀初頭の〈アメリカのフィン人〉が直面せざるをえなかった、もっとも大きな社会的な障壁は、「人種」をめぐる差別であった。比較言語学から導き出された非印欧語族であると

いうフィン人へのレッテルが、「二流市民」という社会・文化的な差別へと転化するにそう多くの時間を必要としなかったのである。「フィン人は、モンゴロイドである」という言説は、二〇世紀初頭の〈アメリカのフィン人〉にとって、合衆国内の黄禍論の隆盛とアジア系移民の排斥運動の高まりとともに、文字通りの「タタール人のくびき」として多重決定的な問題をもたらしていた。

いやらしいことに、人種言説は時代の〈教養〉であった。ブルーメンバッハの本気か冗談か区別のできない持論からはじまり、ゴビノーの貴族的暇つぶしから広まった系統的言語学と形質人類学の混同による「人種分類法」は、二〇世紀初頭のこの時期に欧州でも北米大陸でも揺るぎない真理性を有する科学的成果とみなされ、学問枠を越えて共有されるべき〈知識〉の総体の核を担う面をもっていた。人種という学問手法は、学問の枠を越えて社会に浸透したとき、多彩な科学的分析の一選択肢ではなく、普遍的な価値を計測する黄金尺に変容し、社会は人種という〈知識〉で再構成されることになった。さらにその科学としての〈知識〉そのもののみならず、その周辺に付随する様々な下位知識、俗流物語、はたまた迷信・流言までもが不分に社会の言説として流通するがゆえに、人種の物語はこの時代の抜きがたい棘として、特定の人々を傷つけ続けたのであ



た。

教養としての人種観は、社会の知的上層へ登るほど根深く浸透していった。すなわち人種の偏見の火種は多くの場合、小作農民や工場労働者どうしの喧嘩文句のなかにではなく、法律・教育機関での高尚な講義、箔付きの出版物のなかでくすぶっていたのである。歴史記述の分野も例外ではなく、むしろ人種という考え方が「系統」という過去への語り<sup>ナラチイ</sup>に依拠したものであったため、人種という〈知識〉を埋め込むにはまことに都合の良い分野であった。露骨な結論、巧妙な修辭そして言葉の連想といったように、状況によってさまざまに交奏される人種観に基づく記述法は、当時の歴史書のなかであまりに当然のこととなってしまっていたため、〈アメリカのフィン人〉がみずからの〈歴史〉について何かを書くころとしたとき、彼らは必ず奇妙な序章、すなわち主題の内容に関わらず、「まず」フィン人に関する人種的言説を、まさしく人種的な言説を用いて否定してから物語を始めなければならなかったのである。

#### 4 フィン人、あるいは帰化不能を疑われつづける外国人

一九〇八年一月四日、当時の〈アメリカのフィン人〉たちが直面していた現実を象徴するかのような事件が起きる。ミネソタ州（この州はフィン系移民の割合が非常に高い地域のひとつ

に挙げられる）セント・ポールの地方検事ジョン・C・スウィートは、十六人のフィン人たちの市民権申請を全却下した。その中には、前年七月のメサビ鉱山労働者の大ストライキに参加し、その後「社会主義者」の烙印を押されたジョン・スヴァンの名前が含まれていた。当時「第二書類」と俗称された市民権取得のための最終申請書についても保留扱いとなった。誰の目にも明らかにストライキ推進者に対する報復裁定と考えられたが、その理由として示されたのは、「スヴァン氏は、『モンゴロイド』であるため、合衆国の法体系では帰化不能外国人に該当する」点だった<sup>①</sup>。アメリカへの帰化の可否を仕分けるあの悪名高き人種の限定——一七九〇年に規定され、数度の改定を経るも断固として「自由白人」と外国出身の（つまり奴隷として連れてこられた）黒人、かれらの子孫しか帰化権利を認めない合衆国改正国籍条項<sup>②</sup>——にフィン系移民の人種区分が抵触すると述べたのである。この騒ぎからはぼ三週間後の一九〇八年一月一七日、ミネソタ州東北部のスーパーイオール湖を臨む港湾都市ダルースの連邦第一審裁判所にて司法判断が下された<sup>③</sup>。ダルース地方判事のW・A・カントは、以下のような判決文を讀み上げた。

ジョン・スヴァンは（共和国ではなくロシア帝国内の大公国）



義的に解釈されるころの「白人」かそうでないのかにあるのだ。私が関知する限り、この法律は一貫して実生活に即した解釈がおこなわれている。この法の下ではフィン人は常に市民権を認可されるべきであり、この案件に関し法解釈を交える理由もない。

起請人は疑いなく、合衆国改正条項二一六九号が真に意図し定むる「白人」であると認める<sup>22</sup>。

この判決文においても「フィン人」の祖先を語る物語が、歴史的な〈知識〉として引用されている。判決文のテキストに伏流するのは、フィン人を自称する実存者と徹くさい書物のなかの表現としての「フィン人」とのあいだに結ばれた系譜線を支えている〈歴史〉の確証、歴史的に「真なり」とされた〈知識〉としての言説である。それが、ここでは生きる人間を裁く道具となり、絶対的な尺度に変化する。

この判決の主意は、フィン人に対する「モンゴロイド」という文化的偏見を見せ消しながら、フィン人を「名譽白人」へと仕立て上げようとの企図である。しかし人種の規定をつかさどる根拠じたいは、実のところ法の定義もしくは法の言語世界とは何の関係ももってはいない。厳密にスヴァン氏が対峙させられているのは、当時の〈知識〉の体系から発せられている「引

用符なし」で語られる言説の集合体でしかない。この締めりなく述べ立てられる判決文においてなされているのは、ただ「劣等人種」を物語る幾重もの言葉を並べ立てながら、その言葉と現実の対象とがどれもこれも一致しないという奇妙な告白にほかならない<sup>23</sup>。しかし、判決文中で繰り返される身体的人種規定と、その尺度のフィン人への適用という図式そのもの（それは氣味の悪いほどロウヒの著作の序章に酷似している）は崩れ去るところか、否定するために再び根拠がおかれてしまうことよってむしろ強化されてしまっている。皮肉なことにごこで明らかにされたのは、「フィン人」を語るとき、誰しもが真にせよ偽にせよ人種的観点の語り口を借りずにはいられないという当時の文化背景、いうならば〈知識〉の流通でしかなかった。

##### 5 なぜならば「不能人種」、ゆえに「帰化不能外国人」

ここで「モンゴロイド」という言説はアメリカ合衆国という局所的な社会の場において、どのような意味づけがなされ、その言説が機能するとはどのような状況を表しているのかを掘り下げてみなければなるまい。これまでの議論では、もっぱら〈フィン人〉を一般的な一括りの概念として扱ってきた。しかしアメリカ合衆国のフィン系移民の状況を考察する場合、〈フィン人〉という漠然とした総体は二重にも三重にも階層化され

ていたことを視野に入れなくてはならない。二〇世紀初頭のアメリカ合衆国において、新移民たちは常にかれらのナショナルティを、その〈歴史〉の物語を透かし見られていたからである<sup>28</sup>。アメリカ合衆国におけるフィン人とは、まず第一に移民としてエリス島の門をくぐり、アメリカ各地へ散らばっていった個人への不断なる呼びかけであり、第二にかれらを送り出す母体のようなものと考えられているナショナルティの総体の名

辞であり、そして第三にかれらが揺るぎなき「フィン人である」ことを統括している歴史のなかの普遍者としての〈フィン人〉、たとえ独立した国民の体裁を有せずとも、かりそめの歴史のなかを潜勢力として息づき、二〇世紀に至ってフィンランド共和国の国民として立派に顕示するような運命の物語を疑わぬ〈フィン人〉である——それはツァーリを戴くフィンランドが語られるときにも、そこに臣民ではない国民の歴史を確かに物語れると自負する強い〈フィン人〉であり、さらにはスウェーデン王国の東辺境の地理名称に過ぎぬ「フィンランド」が語られる時代にあつてさえ、支配者として都市を形成していた異邦人の子孫も、いまだ辺鄙な森林に散在する村邑の人びとも、その非協約的な文化も慣習も、いまだ文字にもならぬ諸言語もひとつに束ね、かれらが〈フィン人〉であると優しく保証してくれるような大文字の〈フィン人〉である。この三重の概念は

それぞれ使い分けられるものではなく、多くの場合この三つの要素について、それぞれ個別の言及は、他の要素を取り込みながら、串刺し状に透かされながら重ね合わされていく。アメリカ合衆国に住まうフィン人は、個人としてフィンランド（共和国）国民としての記憶と、その国民の歴史とを「アメリカ人」になる以前の前物語を担うと欲されているがためにフィン人と呼ばれてしまうのである。

ゆえに共和国フィンランドを賞賛する「愛郷的」な新聞記事から、ごくごく私的で和やかな紀行文の投稿にいたるまで、この時期へアメリカのフィン人たちが合衆国のメディアに書き入れる言葉は驚くほどの類似点をもってくる。マサチューセッツ州で発刊された『クリスチャン・サイエンス・モニター』誌一九三八年二月七日号に掲載された記事においてT・R・ユイバラは、「フィンランドでは、ひとびとは身体的な美しさと心の美しさとを融合させている」とかの地の慣習を次々と紹介したのち、「フィンランドの人々は、清潔さを保つために非常に熱心である——多くの家では掃除に一時間以上もかけているようだ。そして彼らの肌は、長年にわたりサウナで蒸気にあたり、戸外で冷やされることによって文字通り、白く輝いているのである」と結んだ<sup>29</sup>。「白く輝く」という言葉が読者に喚起しうるのは、白人種の肌でしかない<sup>30</sup>。

もつとも抽象的で言葉が中心となる歴史的なレベルにおいて、身体的特徴（それは国民性としての身体的特徴を指す）、歴史の文脈のなかで醸造された国民性、国民性の起源としての風土と慣習、そして「世界史」という全く新しい歴史的思想のなかで生まれ、社会ダーウィニズムの環境で育て上げられた人種の文明性についての言説である。個人の肉体的な特徴とその国民の歴史とが、同じ枠組みのなかで語られること、その場に働いているのは越えられぬ民間の質的ヒエラルヒーが厳として存在していることを静かに論ず絶望的なアレゴリーとしての人種論である。合衆国大統領の指名により選出された合衆国デラウェア流域三百周年記念委員会の議長で、ペンシルヴェニア大学教授のクリストファ・L・ウォードの『デラウェア河のオランダ人とスウェード人』（一九三〇）、そして一九三八年の記念出版『デラウェア河のニュースウェーデン』のなかで、あからさまな悪意をもって描写されたフィン人像は、この時代のフィン人に関する人種言説に付着した「国民の履歴書」をみごとに展開している。

フィンランドは、一二世紀以来スウェーデン王国の一部であった。スウェーデンの文明、宗教、そしてかなりの程度の言語が、フィン人のそれらと取って代わることとなった。ス

ウェード人とフィン人とは人種的にも氣質的にも大きく異なっている（……）フィン人はフィンIIウゴル語族の支族であり、ウラル山脈に住んでいたウラルIIアルタイ語族の一派である。（……）フィン人は八世紀の終わりごろフィンランドに移住してきた。フィンIIウゴル人たちは、本来遊牧民であるが、平野部に住むよりも森林部に住むことを好む。彼らは、あまり戦闘的ではなく、政治的組織を編成する資質に欠ける。フィンランドのフィン人たちはこのような祖先の特性を色濃く残していた。

身体的には、彼らは背丈が低く、体軀は屈強で、目尻がつり上がった灰色の瞳をもっていた。彼らはおおよそ公正さをもち、忠実で、従順である。しかし自身について独立心が旺盛であるにもかかわらず、無気力で怠惰である。フィン人について広くいわれていたのは、彼らが卓越した黒魔術使いということであった。呪術は彼らにとってごく自然なものであり、超常の能力は彼らに生まれついでのものであり、魔術は彼らの天分であった。唯一、血を分けた兄弟であるラップ人のみが、暗黒の術において彼らと比肩しえたのであった。

ウォードの提示する歴史記述のテクスト構造も、やはり時間的に三重化されてしまっている。すなわち古代世界と一七世紀

世界とをつむぎ出すおの別の時系に属すべき記述の断片は、同一のテキストに重ね合わされ、それを記述する現代の作者の視点がそれらの記述を、メタレベルから観察記録的に再報告するように透かし見している。言説の対象は決して過去ではない。蠟人形化された〈フィン人〉の標本は、人種についてのキャプションを添えられながら現代の博物館に陳列されているのだ。ウォードの一節にたいし、ニュー・ハンプシャー州フィンランド・アメリカ・デラウェア河流域三百年記念委員会の長フランク・アールトネンは、自らの憤慨をタイプライターにぶつけている。五枚の便せんにびっちり刻み込まれた異議申し立ては、ウォード本人に直接送りつけられたのとどまらず、ニューイングランド地方の新聞各社に送りつけられ、さらには大統領秘書ジェームズ・ローズヴェルト御指名の直訴状としてホワイトハウスにまで及んだ<sup>30</sup>。

あなたがフィンランドの人々、その歴史もろもろのことに  
ついて何もご存じ無いということは明らかです。あなたはた  
だ単に、とくにスウェード人たちによってこの三百年という  
ものあいだ世界中に広められてしまったような誹謗中傷の言  
動を鵜鶎返しにしているだけなのです。彼らは、以下のよう  
なことを世界中に吹き込もうと精力を注いできました。フィ

ン人は劣等民族であり、優秀なスウェード人が「文化」を享  
受し、伝播していくために支配していかなくてはならないの  
だ、と。〔……〕スウェード人にいわせれば、フィン人はご  
主人様のために、働き、食料や雑品を生産する権利は与えら  
れているが、文明人に受け入れられている平等やその他の普  
遍的な人権を付される資格はないなどとのたまっています。  
〔……〕あなたの記述は、フィン民族全体を侮辱するものだ  
と思いますし、私個人に対する侮辱でもあり、また私の家族  
全員に対する侮辱でもあります。私は、生粋のフィン人で、  
わたしの一族はこの七百年の間先祖伝来の農地を耕作して  
きました。いまも全く同じ土地を耕しています。今まで私の  
一族には、一滴たりとも異邦人の血が混じったことはありません。  
祖先たちには代々五人、六人、七人と子供たちが生まれ  
ていますが、私の知る限りにおいて背の丈が六フィートを  
下回ったものなど一人もおりません。家族はいつも全員金髪、  
青い瞳の持ち主ですし、このことは一族の特徴としてこれか  
らも引き継がれることでしょう。〔……〕私の息子も現在身  
長が六フィートあります。あなたは一度息子と会ってみるべ  
きだと考えます。そうすれば、あなたがいかにとんでもない  
誤りを書いていたのかおわかりになることでしょう<sup>31</sup>。

アールトネンの憤慨は、決して一七世紀のフィン人像が正しく描かれていないことへの批判ではなく、「いま、ここにある」偏見の問題にたいするそれである。三百年という時間的乖離によって過去形で埋め尽くされた歴史記述への非難が、現在形の動詞をもって語られているのである。彼が非難しているはずの対象は、祖先の名誉毀損ではなく、あくまで彼の、彼の家族の、フィンランド共和国国民の、そして「アメリカのフィン人」への名誉毀損に他ならない。この投書はある新聞社に段抜きの記事として採り上げられた。この新聞社は、この罅迫り合いに実に象徴的な見出しを付けて、こう紹介している——「ウォードが六フ、ハートのフィン人の怒りに火をつけた」<sup>(32)</sup>。

合衆国において「モンゴロイド」が意味したものは、身体の劣等的特徴、出自の国民の停滞性、歴史における「文明的な不適格者」といった多重的な意味が複合した言説であり、「帰化不能外国人」という名に隠される「不能人種」を指示していた。「帰化不能外国人」という法律用語は、しだいに社会のなかで「不能人種」という意味を二重焼きしたうえで俗諺化し、新移民を語るときのおよそ理性的ではないののしり言葉の雪だるまとなったのだが、それは欧州の古参産業国家と比べ経済力を基盤にした社会的階級というフィクションが未分化もしくは不明瞭な合衆国において、社会を階層化してみる意識の支えという

機能を担っていたと考えられよう。フィンランドの作家アンツ・トゥーリは、自分の従姉妹が一九三〇年代に遭遇した実験をこのように描き出す。金髪の少女は母親にこう求めるのだ。

「ねえ、おかあさん。お外を歩いているときにフィン語で私に話しかけないって約束したでしょ。おぼえてる？」「あら、どうしてなの。」母親がおどろいた面もちで聞き返しました。「だって、あたし、だれかにおまえは移民っておもわれたくないの。ましてやフィンランドから来ただなんて。」「だってあなた」母親は声の調子をあげながらいました。「どうしてそうじゃいけないの？」「だめよ。ヨーロッパからやってきた人たちなんて、文明からとりのこされて、ばかなんだって。そんな人たちは、この国に来て初めてちゃんとした食事を食べられたんだって。それに、学校の教科書にフィン人はモンゴル系だって書いてあるのよ。わたし、目がこーんなにつりあがったモンゴル人なんかになりたくない。教科書を読んだとき、学校みんな私の方を向いて笑い出したわ……。だから、街に出かけたときにフィン語で話しかけないで」<sup>(33)</sup>。

## 6 「共和国アメリカ」の建国者に列せられるのならば……

文明を担いうるか否かという「人種の質」は、二〇世紀初頭のアメリカで植民地期の歴史、「来るべき国民の前史」という神話の合理性を保証する重要な思想的根拠となっている。ニュースウエーデン植民地の歴史が、「合衆国の起源」という一大スペクタクルの筋書きに違和感なく埋め込まれて行かなくてはならないのだとしたら、その歴史を記述する任を負うものは自らの血統証明を観客たちに提示しなくてはならない。

ある特定の国民へ執拗に繰り返し語られる言説、国民を切り出す言説が、歴史記述を決定的に管理してしまう。ニュースウエーデンにかかわるフィン人の歴史の公式な記述、すなわちアメリカ合衆国のもっとも神聖な「前・国民史」である、一七世紀という時代の物語にフィン人の物語をいかに組み込むかという大きな使命を担っていたウォリネンが、なにゆえに教養としての「フィンランドの国民史」を全く同時に記述しなければならなかったのか、という問いに対する答えは、今まで述べてきたような「フィン人を虐げる言説の鎖」に帰しえるだろう。それは、「デラウエアの植民地を語る歴史は、今ここにいるフィン人たちの物語に他ならず、また国民国家フィンランドを語ることに他ならない」ということをあからさまに示唆している。ゆえに、ウォリネンらへアメリカのフィン人の「努力」は、

常に現在形の、現代のアメリカ国民へ向けての努力なのである。〈アメリカのフィン人〉は、『デラウエア河畔のフィン人』の流通と配布に鬼気迫るほどの情熱を注いだ。

この本を出版する目的とは、稼ぎをつくることではなく、フィン人が初期の植民地にて果たした役割と、この国の文明の基礎をつくったという知識を英語で広めていくための、信頼おける情報源を提供することにある（……）。他に比するものなき、英雄的な功績を題材にする歴史の物語ほど、国民の誇りと地位とを引き上げるための影響力を持つものはない。この本は、まさにそのような功績を題材にしているのだ。ページを開けば、われわれの祖先の開拓者たちと、彼らがこの偉大な大地へ入植したことを伝えてくれる。この本は、すべてのフィン人の家庭と、公立の小中学校、高校、図書館に所蔵されるべきである。われわれの民族が、この国の文明の建設に果たした役割について知る機会をつくるべきであるのみならず、アメリカ人一般がこの偉業について知らされるべきだからである。とくに、この功績に関するフィン語の書籍を読むことができない、また現在学校でアメリカ史を学習しているわれわれの若い世代の者たちにとっては、補習のためにこの本をあたえることは急務である。その結果、われわれは



自尊心を高め、さらにわれわれの民族、伝統、貢献に対する賞賛を不朽のものにするのだ。

さらに、誕生日、クリスマスや他の機会にプレゼントを贈るとき、この国に入植し、文明を築いた祖先たちの歴史を語る、この本ほど喜ばれるものはないのである。

ゆえに、『デラウエア河畔のフィン人』は、すべての地域社会で手に入れられるようにすることが重要になる。われわれは、あらゆる委員会、組織、個人に、この本が有用に、適切に行き渡るように熱心に活動を続けている。いま、この本を何冊か手にいれたものは、他の者に譲り渡すよう努力し、また他の者から購入を委託されたものは、さらに多くの注文を取るよう努力してほしい。そして、まだこの本を手にしていない委員会、組織、個人がいて、彼らが興味を持ったのならば、すぐさま送り届けるべきである<sup>33</sup>。

クリスマスや誕生日のプレゼントとして、手渡しでウォリネンの本が渡され、広められていくその様は、フィンランド大公国のフィン人がその八九年前に経験した記憶と驚くほどにている。一八四九年、フィンランド大公国において、エリアス・レインロートの編纂したフィン人の民族叙事詩『カレヴァラ』の改

訂版が出版されたとき、それはやはり大学で学ぶ学生がクリスマスや誕生日のプレゼントとして、帰省時に持ち帰るように宣伝された。民族の忘れられた記憶を呼び戻すものとしてフィンランドのナシヨナリズムの底本となった『カレヴァラ』は、叙事詩の存在そのものが具体的内容以上に、フィン人というばやけた存在を可視的にした。フィン人とは何か？ それはカレヴァラに描かれる人物たちである。こんどは（アメリカのフィン人）が、ウォリネンの著作のなかに、デラウエア植民地のなかに自己を代替する番である。（アメリカのフィン人）とは何か？ それはブリテン人、オランダ人、フランス人、スウェード人と並ぶ、五番目の「共和国アメリカ」建国者の祖系である<sup>34</sup>と。

アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州のチェスター市、いにしえのフィンランドの記念碑に歴史書を埋めること、それはすでに（アメリカのフィン人）——さらに言えば、フィンランドの国民としての（フィン人）——の形成するメンタリティのある部分までが、アメリカ合衆国という国民国家的な発想の枠組みに相互依存しながら自己形成し、そのブリコラージュ的な自己像を反復しつづけているのだという告白に他ならない。

- (1) Public Resolution, no. 102, 74th Congress (H. J. Res. 499).
- (2) 一八八八年に開催されたワシントン・スウェーデン植民地二百五十年記念祭、一八九一年シカゴにおけるリンネ像の建立、一八九三年のシカゴ万国博覧会へのスウェーデンの参加祝賀、一九二六年の首都ワシントンに建設された発明王エドウィン・ヘッソンンの記念碑といった数々の活動と、一九三八年の祝祭とは長い歴史的な系譜性があろう。Dag Blanck, "History at Work: The 1888 New Sweden Jubilee," in *Swedish American Historical Quarterly*, 39 (1988), pp. 5-20.
- (3) 「われらスウェーデンの血を引く者には、このアメリカの基礎を築いた〔……民族〕ゆえに他の民族の王座に甘んじざる必要はないのだ。しかし不幸にもこの国においては歴史の授業も教科書もアメリカ史におけるスウェーデン人の貢献をまったく無視するか、ついで程度にしか言及しようとしなす。こうだった現状は不遇というほかなく〔……もしその真実が〕一般に知られるようになれば、まちがちなく移民制限法がスウェーデン人にとって好ましい処遇をとり〔……〕スウェーデンからの移民たちがアメリカにとりて異質であると見なされることは、ほとんどの場合であるだろう〔……そのための〕究極のチャレンスを手に入れたければならぬ」。Swedish American Tercentenary Association, *New Sweden Tercentenary for Commemorating the 300th Anniversary of New Sweden in the Delaware Valley* A. D. 1638, "To the Officers and Individual Members of all Organizations in the St. Paul-Minneapolis Area, Having Interests in matters Swedish-American, Swedish American Tercentenary Association, New Sweden Tercentenary," n. d., American Swedish Institute.
- (4) Cited from Mr. Allen of Pennsylvania, "First Permanent Settlement in Delaware River Valley." (Report to Accompany S. J. Res. 135, 75th Congress 1st Session, Report no. 1391).
- (5) S. J. Res. 135, 75th Congress 1st Session.
- (6) John Henry Wuorinen, *The Finns on the Delaware, 1638-1655: An Essay in American History*, New York, Columbia University Press, 1938.
- (7) John Saari, "American Finnish Delaware Tercentenary Committee Financial Statement, New York, N. Y., October 15, 1938." Emil Hurja Papers (EHP), Box 136, Franklin Delano Roosevelt Library (FDR Lib.), Hyde Park, New York.
- (8) ウォリネンの編纂しているこの事実関係は、次の記事に依拠している。"Recent Deaths," *American Historical Review* 75, no. 2 (1969), p. 707; "In Memoriam: John Henry Wuorinen," *Pohioical Science Quarterly*, 86, no. 1 (1971).
- (9) Harry Elmer Barnes (ed.), *Ploentz's Manual of Universal History*, Boston, New York Chicago and San Francisco: Houghton Mifflin Company, 1925.
- (10) Edward Mead Earle and John H. Wuorinen, *An Outline of Modern History 1500-1830: A Syllabus with Map Studies*, vol. 1, and *An Outline of Modern History 1830-1936: A Syllabus with Map Studies*, vol. 2, New York: The Macmillan Company, 1936.



「解剖学ニ生理学的手法」と酷く類似する。〔……〕上訴人に利するよう、この用語には一七九〇年の起草者が本来想定していたはずの意味を与えるべきであり、当時この語は本国家に居住していたインディアンと、黒人つまりアフリカ人種を除外するという単一の目的を果たすためだけに使用されていたと主張されている。たしかにこれらの二人種が除外されると想定されていた点は真実かもしれないが、だからといって当該二人種のみが制定法の意図の唯一の規制対象であったと主張するのは、この立法の持つ積極的な形式を無視することになる。この規定は、ニグロやインディアンだけが除外されると説くのではなく、結局のところ、自由な白人だけが包含されるべきと指示しているのである。その意図は、市民権という特権を、父親が白人であると認知されていた諸個人の集団に付与することにあるのであり、そのように分類されえない者には拒絶していたのである。〔……〕「白人」という文言が「コーカソイド種の間」であると同義であるという判断決定は、事案を完全なる決着に導くとは言えないが、問題の道筋を単純化してくれよう。〔……〕「白人」という文言がコーカソイドを指しているという結論は、帰化の権利を持つものと持たざるもの間に明確な境界線を引くという意味なのではなく、むしろ帰化資格を持つものがいるのは明白である一方で、同時に帰化資格を持たないものも存在するところの明白だという、多少の議論の余地があるとはいふ否定できない領域があることを示しているのだ。〔……〕寧なことだ。この判決は次の一文で締めくくられていよう。〔……〕もちろん、それは個人の資質についての問題あるいは人種上の劣等性について示唆するものではなく、このような見解は、いかなる意味においても勘案されてはいない」。

(23) *John Swan v. U. S. U. S. District Court Sitting in Duluth, MN* on Jan. 17, 1908.

(24) "Reprint of Duluth District Judge W. A. Cant's statement and decision in the case of John Swan and 16 other Finns" in *History of the Finns in Minnesota*, Hans R. Waassten, ed., Toivo Rosvall, trans., Minneapolis: Minnesota Finnish-American Historical Society, 1957, p. 477.

(25) このジョン・スワン判決のお粗末な顛末と完全なる対称形をなしているのは、ハンジャーフ出身のバーガット・シン・ティンが帰化却下された判決であろう。スワンは人種論的分類ではモンゴロイドであるが、容姿は白人という理由で帰化が許可された。一方でティンが「人種論的には」まがうことなき「コーカソイド」(その最も俗っぽい試金石とは「印」欧語族に属するか否かである)であったが、彼の容姿が白人とはとうてい言えないとの理由で帰化が却下されたのだ。United States v. Bhagat Singh Third, 261 U.S. 204, (1923).

(26) たえば、ジョン・ハイナムは、このような「特異な」メンタリティを反映したものとして連邦政府が主導実施した一九二〇年代より始まる本格的なセンサスの意味を読みとっている。John Higham, *Send These to Me: Immigrants in Urban America*, Revised ed., Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1984, p. 9.

(27) T. R. Ybarra, "Patriotism — Finnish Style" in *The Christian Science Monitor* (December 7, 1936) in *Hippaka Lemhi Papers*, Box 1, Immigration History Research Center, University of Minnesota, Minneapolis, Minnesota.

(28) このフィン人の清潔さについての言及は非常に多く繰り返され

た。特に冬戦争勃発（第一次ノルウェー戦争）に連動してフィン人に対する同情が合衆国メディアの論調の主流になる。一九三九年以降定型句としてフィン人を語る際の枕詞となっていく。たとえば、*Life* (October 30, 1939) を参照。合衆国における清教徒的価値観をさぐるような国家は、しばしば国民が他国に例が見られなく。

- (28) Christopher L. Ward, *The Dutch and Swedes on the Delaware, 1609-64*, Humphrey Mifflord: Oxford University Press, 1980, pp. 102-103; and *New Sweden on the Delaware*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1938, pp. 43-44.
- (29) Frank Aaltonen to James Roosevelt, Letter of June 13, 1938,

FDR Lib. O. F.: 2242.

- (30) Frank Aaltonen to Christopher Ward, Letter of June 3, 1938, EHP Box 138, FDR Lib.
- (31) "Ward Arouses Ire of Six-foot Finn" in Unidentified Newspaper Clippings, n. p., n. d., EHP Box 138, FDR Lib.
- (32) Antti Tuuri, *American Rain*, Helsinki-Keuruu: Otava, 1986, s. 188.
- (33) American Finnish Delaware Tercentenary Committee to Delaware Committees, Other Organizations, and Individuals, Letter of October 14, 1938, EHP Box 136, FDR Lib.

(本邦の大学で博士後期課程)